

記憶の夢

四神 夏菊

夢の前

トロピカルアイランド

時間は夕方が終わりと夜が始まったばかりの時。

テイルス達との一時を楽しんだストレンジャーは、一人島に向かって飛んでいた。

少しづつ暗くなる空を見ながら

しばらく飛んでストレンジャーは小屋の近くの砂浜に降り立ち、少し歩いて家のドアを開けた。

「ただいま」

真っ暗な部屋を進み、蜀台に明かりをつけ、ストレンジャーは家の隅にあるシャワーを浴びに行った。

夕飯はもう済んでいたのだから浴び終わったあと、やしの木の上に乗っ横になった。

そして、そのままやすやすと、寝息を立てて眠りだした。

平和の時

つぶった目を開けると周り是一片真っ白な風景。
地面と思われる場所に立っていたストレンジャーは前方に進みだした。
すると霧が晴れ、ストレンジャーはどこかの島の上に立っていた。

『ここ、見たことがある。』

空は雲ひとつ無い快晴の空。
緑が生い茂り、木があまり生えていない草原。
後ろは綺麗なコバルトに染められたかのような真っ青な海。

『ここって、もともと自分がいた島だ。』

いつの間にか周りにはさまざまな種族の人達が歩いていたり飛んでいたり。
大人や子供達が皆、楽しそうな表情をしている。
風景を一通り見終わったあと、ストレンジャーは歩き始めた。
走ってきた龍の子にぶつかりそうになっても、夢なのでストレンジャーを抜けてそのまま走り去っていく。
しばらく歩いて、島の南側から東側へ
草原から変わって砂浜のエリアになっていた。
その周辺には小屋が転々と立っていた。

『自分がもともといた島ならこの近くに、 あった。』

ストレンジャーは二階建ての小屋に向かっていった。
やしの木に囲まれた少し小さめの家。
近くに行くと家のドアが開いた。
出てきたのはまだまだ子供の龍。

「じゃあお母さん、行ってくるね。」
「ちゃんと夕方までに帰ってきなさいよ。」
「ハイ。 いってきまーす。」

子龍は砂浜とは逆の方向へ走っていった。

母龍は家に戻っていった。

『あれって、自分？』

走っていった子龍を見ながらストレンジャーは言った。

『じゃあ今のって、』

ストレンジャーは走って家の窓から中をのぞいた。

木製の家具が転々と置かれ、奥のキッチンにさっきの母龍が料理の下ごしらえをしていた。

『母さん。 じゃあここは、もともといた自分の家。』

ストレンジャーは家を一通り見たあと、さっき走っていった子龍のあとを追いかけた。

『さっきのが自分なら、あそこにいるはず。』

ストレンジャーはふわふわした空間に羽を広げ羽ばたき、飛んでいった。

ストレンジャーは少し飛んで島の中心の泉の近くへ向かっていった。

そして近くの森に降り立った。

辺りは森の一角を切り取ったように木が無く、中心の泉は綺麗な泉の水が噴水のように吹き上げていた。

辺りを見ていると森からさっきの子龍が出てきた。

「やったー、一番乗り！」

すると別の方角の森から赤い子鳥がやってきた。

「あ、ストレンジャー、また一番乗りだね。」

「あ、アルドール。」

「いつも早いよー。」

「そうだよー、たまにはゆっくり来たらしいのにー」

さらに別の森から白い子虎と緑の子亀がやってきた。

「ピスフリー、ジョイ。」

「じゃあ皆そろったね。」

「早く遊ぼー」

「今日は何をする？」

「今日はおくれんぼがいい！」

「じゃあ鬼決めよ！」

4人「ジャン・ケン・ポン！」

「あ、ストレンジャーが鬼ー」

「あー、負けちゃった。」

「30数えてねー」

子虎と子亀と子鳥は子龍を置いて隠れてしまった。

子龍は一人、数字をカウントしている。

『懐かしいな、アルドールやピスフリー、ジョイがいる。この夢、自分の過去か。』
いつの間にかカウントを終えた子龍は3人を探しに行ってしまった。

ストレンジャーが少し泉に向かうと、いつの間にか時間がずれ、夜になっていた。

『時間が流れたのか、でも確かこの後って。』

ドカーン！！

ストレンジャーが言うと島のどこかで爆撃音がした。

『まさか！！』

ストレンジャーは急いで空に飛び立った。

すると、海の4方からたくさんの船が島に向けて、爆弾を撃っていた。

『まずいな、見に行ってみるか。』

ストレンジャーは子龍のもとへ向かっていった。

終わる平和

島の南側に向かうと、たくさんの龍たちが海を見て船を確認していた。

「まずい、侵略軍だ！」

「大変！！」

「子供は家から出すな！ 親は皆こっちへ集まれ！！」

龍達は指示をだしあい、パニックになっていた龍たちを静めた。

「お母さん！！」

ストレンジャーは声のしたほうを見た。

それはストレンジャーが昔いた家。

「行かないで！！」

「ストレンジャー、お願い家で待ってて。」

「お母さんがいないといや！！」

「お願いだから、ね。」

「いや！！」

バツ！

母龍は子龍を抱いた。

「ストレンジャー、貴方の名前の意味、覚えてる？」

「……………」

「ストレンジャー、それは強さを示す意味。心の強さを示す意味。」

「……………」

「だからたとえ一人になってもくじけちゃいけないのよ。」

「うん、 わかった。」

「いい子。」

母龍は子龍の頭をなでた。

「でも必ず帰ってきてね。 約束。」

「約束。」

母龍は子龍を家へ入れると鍵を閉め、皆が集合している場所へ向かっていった。

一人になった子龍は自室へと戻っていった。

そして大人たちは海に集まり、襲撃に備えていた。

そして海からの船がやってきた。

「侵略軍なんかに島を渡すな！！！」

「この島をいただきかせてもらう！！！」

戦いが始まった。

ストレンジャーはいつの間にか、家の部屋の中にいた。

隅のベットに子龍が布団にもぐっていた。

『小さい頃、島を侵略軍に襲われ、自分は震えながら母さんの帰りを待っていたんだよな。』

しばらくすると家の中についているスピーカーから声が。

「家に非難している子供達に告ぐ、非難経路を通過して中心核へ集まれ！！ 大至急だ！！」

子龍は布団から頭を出し、辺りを見回し誰もいないことを確認するとベットから出て部屋を出て行った。

ストレンジャーもあとについていった。

子龍は家のリビングにおいてあった宝箱を開け、中から武器が詰まった袋を取り出した。

それを背中にしょい、階段の下についている窓を開け、避難通路へ向かって滑っていった。
滑り終わり地下通路に立った。

子龍は少しずれた袋を頑張っしょい直し、奥へと走っていった。

しばらく走り、中心核へと付いた。

すると島の上の人が言った。

「侵略軍が思った以上に侵攻してこのまま侵略が進んでしまう。君たちには種族を終わらせないためにもこの島から別の島に移ってもらう。」

「お父さんやお母さんはどうするの??」

子供達は言った。

「残った親たちはこのままがんばる、非難を優先しろと言われたのだ。皆が非難したあと親達もちゃんと非難する。安心しろ。」

「とりあえず皆早くこの先に進んでくれ。」

子供達は奥へと進んでいった。

泣いているのもいた。

指示を出していた親達は子供達の先導を切るもの、誘導するものに別れテキパキと行動していた。

子龍は少し涙目で進んでいった。

奥に着くと大きな装置が付いていた。

「さあ、皆、順番にこの装置に乗ってくれ。」

「どこへ行くの?」

「他のもっと安全で住める島に送ってくれる。どこへ行くかはわれわれにもわからない。さあ、乗って。」

大人たちは先頭の方にいる子達からのせ、転送していた。

「ねえ、ストレンジャー。」

ストレンジャーは声がしたほうを見た。

子龍は涙を拭いて声がした方を見た。

「どうしたのアルドール、ピスフリー、ジョイ。」

「4人みんなばらばらになっちゃうでしょ、だからこれ。」

アルドールは水晶で出来た星を出した。

「皆がまたあうためのお守りに、これを持ってて欲しいの。」

「4人再開したら一つの星になるんだ。」

「私の家に会った物なんだけど、ハイ。」

アルドールは砕いてパーツになった一つをストレンジャーに渡した。

「ピスフリーとジョイにも。」

「これで皆いっしょだね。」

「またいっしょになろうね。」

「うん！」

4人は握手した。

「君たちが最後だ、」

「早く乗って！」

「皆で乗ろう。」

4人はいっしょに機械の上に乗った。

「再開の兆しは大切に持っててね。」

「また皆と遊ぼうね！」

「また会いましょうね。」

「絶対再開しよう！」

それぞれが言うとおぼえてしまった。

すると風景が歪み、別の場所に着いた。

『ここは、トロピカルアイランドか？』

ストレンジャーは島の風景を見てどこか大体察しが着いた。

すると前方に光が一点に集中し、さっきの子龍が出てきた。

子龍が辺りを見回した。

「皆と、ばらばらになっちゃった。」

少し涙目をしていたが、子龍は手で涙を拭った。

「でも、お母さんに言われたんだ。僕負けない！」

子龍は分けてもらった水晶をしっかりと持って進んでいった。

すると風景に霧がかかっていった。

再開の約束

ストレンジャーが目を開けると小屋のやしの木の上にあった。

「夢だったのか。」

体を起こし、地面へ降りた。

『少し忘れかけてたけど、また皆に会えるよな。』

水晶を入れたリストバンドを手に付いていることを確認してストレンジャーは外へ出て行った。

皆との再会を願いながら。

END

記憶の夢

<http://p.booklog.jp/book/89098>

著者：四神 夏菊

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lilysfia/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/89098>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89098>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ